

My Dear Loneliness

黒樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

経験する。どんな理不尽も、哀しい結末も、未来も、過去も、今も、全ては明日のために。君のために僕は生きていく。君のために命を使う。使命とは、そういうものだから。

※作品タイトル迷走中。

目次

prologue	1
気に入られたいなら、まずは胃袋を掴め	7
お隣さんは魔法少女	15
友達以上??未満	22
ママの弱点	29
相違点	37
黒い影	44
太陽は昇り、月は沈む。	52

prologue

私が彼と初めて話したのは見滝原中学校の図書室だった。偶々、図書室に用事があった私が図書室に行くとその子は部屋の片隅で本を読んでいた。どんな本なのかはタイトルが見えない。けれど、私の気を引くには十分な要因が首筋に焼き付いていた。

魔女の口づけ。真っ黒な蝶のような邪悪な印、それは魔女に魅入られマーキングされたことを意味している。そして、その徴を与えられたものは殺人や自殺を試みるようになる。

私は思わず、灰色の雰囲気醸し出していた彼に声を掛けてしまった。

「ちよつとー!」

「……う?」

声を掛けられたその子は顔を上げて周囲を確認する。私達以外に誰もいないことを確認すると、その子を見ていた私と視線が合うなり目を逸らした。

私は気まずいながらも話題を探す。

「えつと、君、何年生?」

「……あなたと同じ三年生ですよ。バمامィさん。同じクラスですし」

「えつ、あつ、十条君?」

言われて思い出した、比較的教室の隅っこでおとなしくしている男子生徒だった。うっかりにも程がある。誰にも興味なさそうな彼が私のことを覚えているのに、私は一瞬でも忘れていたなんて。

しかし不思議なことに、十条君は魔女の口づけを受けながらも正常な精神を持っているようだった。本来、魔女の口づけを受けた人間はありもしない自殺願望や殺人衝動に駆られる筈なのに。彼には全くその傾向がない。いつも通りなのだ。

「ごめんなさいね。一瞬、誰かわからなかったの」

「いいですよ。あなたと話すのは初めてだ。覚えていなくても無理はないですから」

私の失態を笑って流すのではなく、淡白に受け流した。
興味なさそう。というか、実際、興味ないんだろうなあ。
そんな学校生活って可哀想、というかなんていうんだろう、勿体ない。

私はいつも思っていた。寂しがりな私がそうだったから。

「それで何を読んでるの？」

「ライトノベルです」

「らいとのべる……？」

「魔法少女とか異世界とかファンタジーとか恋愛とか。日常とか。まあ、色々です。そういう本だと思っていてください」

ライトノベルが何かわからない私に彼は適当な言葉を並び立てる。思わず「魔法少女」という単語には吃驚してしまっただけど、相変わらず人の顔を見て話さないから、私とその単語に反応した事はバレていないみたいだ。

「……」

それから数分間、静寂が二人を包んだ。正確にはどんな話を男の子としていいかわからないから、話の振り方に困っていたわけなのだけど、彼を観察するに彼もまた本が一頁も捲られない。どうやら、私がいるせいで集中できないようだ。そういうところが神経質なのかもしれない。邪魔、しちやったかな。

「あの……何をしに来たんですか」

ついにこの空気に痺れを切らした彼が問う。

私は私で彼の向かいの椅子に座って眺めていたから当然かもしれない。

それも彼をずっと観察しているのだから、視線に気づいたのだろう。

「用事があったんだけど、忘れちゃった」

「はあ……」

一応、相槌を打って彼は本を読むフリをする。全くページは進まない。

「ねえ、十条君」

「何ですか、巴さん」

「放課後予定はある？」

「ありませんが……」

「じゃあ、私と何処か行かない？」

「は？」と間の抜けた声が十条君の口から漏れた。いつも、ぼーっとしている彼の声が高くなっていた。

「何ですか」

「嫌なの？」

「意図がわかりません」

「別に何か企んでるってわけじゃないのよ。ただ、君が気になっただけ」

ズルい言い訳を私はした。確かに気になった。魔女の口づけを受けて、ここまで普通に暮らしている人間がどうして何も起こさないのか。定番なら、屋上からの飛び降り自殺だけど、絶対にそれは阻止しなければいけない。

私はカマをかけてみることにした。意味は、ないのかもしれないけど。

「だって、今にも死にそうな顔してるもの」

我ながら酷いことを言ったものだ。

しかし、彼はこう答える。

「……死ぬるものなら死にたいですね。こんな、つまらない世界。こっちから願い下げだ」

私はその瞬間、少しおかしくなってしまったのかもしれない。

パンツ、と赤い花が彼の頬に咲いた。



ついやってしまった。その後、自分でもわけのわからないほど「命を大事にしなさい」とか説教をして、彼に激しく当たってしまった。別に嫌いかさそういうわけではない。ただ、彼の言葉が妙に腹立たしかった。私の心を深く傷つけられたような気がしたから、そんな言葉

を吐いた十条君の頬を引つ叩いてしまったんだろう。

だから、放課後の事も有耶無耶になって十条君は帰ってしまった。一度、私に視線をくれたものの会うのが気まずいのかそうやって逃げないように帰宅を始めたのだ。

私も気を取り直して、彼を追う。

何より彼の首には魔法の徴があった。今、一人にするわけにはいかない。

「いた」

彼を見つけたのは工場地帯の廃ビルの前。

中へと入って行く、見滝原中学の見慣れた制服姿が見えた。

急いで跡を追いかけて、廃ビルの中に入る。

すると、景色が歪んだように変わった。

「うそっ、まさか……!」

魔法の作り出した、結界。それに入ってしまったのだ。

「ああ、もう、速攻で片付けるから!」

私の名前はバمامィ、見滝原中学三年生。そんな私にはもう一つ、違う顔がある。昼は何処にでもいる普通の女子中学生。そして、そのもう一つが見滝原市を守る魔法少女。それが、私のもう一つの姿。

ソウルジェムを具現化し、変身を早く済ませると魔法の手下がやってくる。魔法の元へは行かせまいと手下がわらわらと沸いて私に攻撃をしてくる。まるで、十条君を追いかけて来た私を邪魔しているようだ。

武装のマスケット銃を乱撃して手下達を倒しながら奥に進む。最深部に到達した時、ようやく私は彼と、魔法の部屋を見つけた。

「十条君、大丈夫!」

「……巴さん?」

私のヒラヒラとしたコスチュームを見て目を白黒とさせる。

いや、白黒とさせたのはこっちの方だ。

何せ、十条君の目の前には一緒にお茶をする魔法の姿があったのだから。

器用に植物の蔓を動かして、ティーカップの中身を啜る、魔法の姿。

小さな、人間のような魔女だった。

緑の髪と、翠の瞳、それはもう今までのとは違う異質な魔女。

「その魔女から離れて！」

「魔女？」

今、説明している暇はない。出来るだけ早く遠ざけたかった。けれど、彼は首を傾げて異質な少女を見ると「ああ」と納得したように微笑みを見せる。

「それはできない相談だ。この子はね、僕を殺してくれるらしいんだ。自殺する勇気もない、弱い僕を、殺してくれる。僕に死ぬ勇気を与えてくれる。なんで離れなくちやいけないんだ？」

「狂ってる……！」

「うん。そうかもね。普通の人からしたら。そうなのかもしれないけど、退屈で辛い事しか待つていない人生なら捨ててもいいだろう？」

「それはあなたの本心じゃない。魔女に惑わされてるだけ！」

そうだ。普通の人間みたいに話すから忘れていた。魔女に惑わされている、そのせいで彼はあんな事を口走った。それに激怒して私は彼を平手打ちした。本当に恥ずかしい。

銃口を向けると、彼は射線上に立ち塞がる。

「退いてー！」

「嫌だ、と言ったら？」

「こうするわ」

リボンを伸ばして十条君に巻き付ける。完璧に捕まえた、その瞬間に引き寄せるように引っ張って彼を射線上から退けてから、私は大量の銃を召喚した。

「早速で悪いけど、終わりにするわ！」

戦闘は程なくして終了。魔女の結界も解除され、廃ビルの屋上へと戻って来た。もう既に辺りは夕暮れで茜色に染まって、後に黒の帳が落ちるだろう。彼は私の姿を見て、こう言った。

「……魔法少女ってフィクションじゃなかったっけ」

「残念ながら、実在するわ」

「ああ。本当に残念だったなあ。死ぬチャンスだったのに」

まだ、そんな事を言っているの……？

だって、魔女は倒したはずで……。

「な、なんでその首……！」

十条君の首には魔女の徴が刻印されていた。魔女を倒したのにも関わらず。彼に徴を付けたのが別の魔女だったとか、或いはそういう事なのかもしれない。しかし、彼は私の言った意味がわかったのか首筋を触る。

「ああ、これ？なんか最近、浮かんで来てさ。そしたら、毎日僕を殺してくれるって怪物達がわんさか集まってくるんだけど、誰が殺すか揉めてて未だに殺してくれないんだよ」

「ふ、複数の魔女に魅入られてるの……？」

「さあ、知らない。わからない。魔女って単語も、察するにあの子達の事なんだろうけど」

ふわあ。と、欠伸を一つ。

ああ、わかった。この人は……。

「……あなた、本気で死にたいって考えたことはある？」

本気で死にたいと思っているのだ。十条君は嘘のない瞳で肯定した。

気に入られたいなら、まずは胃袋を掴め

「テイロ・フィンナーレ！」

巨大な銃の銃口から閃光のような弾丸が発射される。その弾丸は真っ直ぐに魔女を貫き倒した。すぐに結界は解除されて現実世界へと戻ってくる。ほつと一息ついたのも束の間、闇夜の中からぬつと姿を現したのは、ジーンズにパーカーの男の子。十条君だった。

「毎日毎日ご苦労様だね。お疲れ。はい、ドリンク」

「ええ、ありがとう」

今月はこれで十件目。十件中、十件。そのどの魔女を倒した時も十条君は出て来た。流石にそこまで出会すと会話することもあり、今ではこんな風に会話する中で、学校でも割と話す男子生徒になってしまった。そして、最初の余所余所しい態度も少し緩和して彼なりの砕けた口調で話してくれるようになった。

「でも、女の子がこんな時間まで出歩いていて大丈夫なのか？」

自分の分のドリンクを開けて彼は指摘した。

まあ、確かにこんな時間まで女子中学生が出歩いてるなんて知れたら、夜遊びだとか思われるかもしれない。

私の身の危険とか心配してくれているんだろう。彼は割といい人だった。

「大丈夫って何が？」

「親御さんとか。何か言われたりしない？」

「その話、ね……」

私は話すべきか話さないべきか悩む。特に隠す事でもないけれど。特に親密でもない彼に話しているものかどうか……魔法少女、という秘密を知られておいて、他の人よりは私について理解ある人だと思うけれど。

彼はどうなんだろうか。

「あなたこそどうなの？」

「僕は一人暮らしだよ。妹とか諸々いるけど、別居中」

「そう。じゃ、お互い独りぼっちってわけね」

ふふふつ。と微笑んで見せると何故か怪訝な顔をされた。

「巴さんは寂しいんだ」

「……まあね。私も人並みに寂しくなってしまうこともあるわ」

「……ふーん」

「あなたはそうならないの？」

「別に一人の方が楽だから……といっても、寂しくなるってのは少しだけ分かる気がするかな」

強がっているわけでもなく、共感された。

十条君はカラカラと笑いながら、さも笑い話のように私に告げる。

「たまにこうして巴さんと話すことは密かに僕の楽しみになっているからね」

「ふふつ。ありがとう」

とても恥ずかしい事を言っていることに気づいているのだろうか。その私も彼と話すことが毎日の楽しみになっている時点で人のことは言えないのだけど。

「極稀に僕も人とのつながりを欲しているとは思うよ。まったく、人間ってのは不便で嫌だな」

「十条君はもつと人と関わらないと」

「嫌だよ。面倒くさい」

確かに面倒な関係だと思う。それでも、一人で大丈夫だなんて、虚勢を張っているだけ。要らないと思いつつも、本当は私達は必要としている。

「さて、帰ろうか。送ってくよ」

「私、魔法少女よ。怖いものなんてないわ」

「一人で帰すと僕が眠れなくなるんだ」

「……まったくもう、心配性ね」

帰り道は少し寂しい感じが嫌いだった。

私はクスリと微笑んで、彼の厚意に甘えた。

「……此処？」

「そうよ。十条君もあまり遅くならないうちに帰りなさい」

「そうは言うんだけどさ、巴さん」

マンションを見上げた十条君が引き攣った笑みを浮かべる。

その意味は、数秒後に明かされた。

「僕の家も同じマンションなんだけど……」

◇

いつからか私はこんなアクションを起こすようになった。

「十条君、一緒に帰りましょう」

知り合って一月程。正確には、仲良くなってんだけど。

私の誘いに彼は怪訝な顔をした。だけど、少し頬が赤くなっている。と、くれば少し照れているのか目を逸らして首に手を当てながら考え込むような仕草をした。

私も私で一人の帰路は寂しかったから、というのと。

実は、十条君の家は私が住むマンションの隣の部屋だった。という理由がある。

どうして気づかなかったんだろ。

それは十条君が人見知りし過ぎて、近所付き合いか苦手で、しかも表札もないものだから住んでいる人の検討どころか住んでいるのかさえ知らなかったから。

私も隣については深く知ろうとしなかったし、問題はなかったのだけど。

縁があるとは、思う。そんな縁を露骨に信じた私が取った行動といえば、同じ帰り道を歩くということくらい。

「……一緒に？」

「なあに？嫌なの？」

「別にそういうわけじゃないけど……」

「じゃあ、帰りましょう」

半ば強引に彼を連れ立って教室を出て行く。誰かと一緒に帰る、な

んて事を今まで考えてこなかった私は少し浮き足立っていたのかもしれない。なんだか最近、十条君と巴さんが付き合っている、なんて噂を耳にするけどまったくの無実だ。

家は同じマンションだし、魔女探索に出れば必ず会うし、放って置けないしで特別なことなんて何も無い。

そう、何も無いはず。気づいたら近くにいる、ってだけで。

「ところで、十条君は甘い物好き？」

見滝原市で今話題の移動型クレープ屋の前に差し掛かったところで、私はこんな質問を試してみた。

「そうだね。よく作るよ」

何故か不明瞭な答えが返ってきた。この場合はどう捉えたらいいのだろうか。好き？嫌い？わからない。私もたまにはクッキーくらい作るものだけど。そういうことなのだろうか。

「作るって……」

「好きな食べ物はもつと美味しいものが食べたいだろ。僕は、その限界を作り出すのが趣味。配合を少し変えるだけで味が変わるから、これがなかなか面白くて」

「例えば、何を作るの？」

「クッキー、ケーキ、プリン、ゼリー、パンケーキ、マフィン、この前はマカロンとかスコーンを作ったよ」

指折り数えていく十条君の趣味は見た目に似合わず。

「特に色んな紅茶の茶葉を混ぜると市販の紅茶クッキーとは味が変わってまた面白いんだ。あと、漫画やアニメの真似をして紅茶コロツケなんて作ったけど。中々興味深い味だった。美味かったなあ」

うう、聞いていたら食べたくなってきた。食欲が沸きそう。もう私の視線はクレープ屋などではなく、十条君の作るお菓子にロックオンされている。

「……ジー」

だからと言って、作ってなんて言えるはずもなく。

思えば、睨むようにして彼を見ていた。

そんな私の視線には幸か不幸か気づくこともなく、十条君は鮑を漁

り始める。

何事かと見守っていると、鞆から出た手には一つの小包が。

「クッキー焼いたんだけど……」

「ちようだい！」

「……別に変な薬とか、入ってない……」

ガラにもなく、はしたなく十条君が差し出した小包に手を伸ばしてしまった。

「あつ、ごめんね。君が話すからなんか食べたくなっちゃって」

「いや、いいんだけどさ……好きなの？」

「ふふっ。女の子だもの、みんな甘いものは好きよ」

ガラにもなくはしたなく催促してしまった私は頬を赤らめて、十条君の手作りクッキーを受け取る。

さて、こうなるとこのまま「サヨナラバイバイ」じゃ私も格好がつかない。何よりこんなものを貰ってにおいて、何かお返しをしなくてはいけない。となると、どうしたものか。

家の中に上げてお茶、なんてハードルが高過ぎる。私の今までの男性経験は殆ど皆無に等しく（男性教員や男子生徒と会話しただけ）、また男子を一人暮らしの部屋に上げるというのも何か抵抗がある。

「……」

味見程度に一口貰って、小包の中のクッキーを齧るとこれまで食べたことのないような甘味の美味しさが口いっぱいに広がって私は驚きのあまり硬直。

「それなら、家に紅茶とよく合うマフィンがあるけど……」

「ねえ、十条君、速攻で帰って今から私の家でお茶しない？」

……心変わりが早いのか、私の覚悟はこんなものでした。

言い訳をするなら、十条君は良い子だし害悪はないように見える。こんな優しい彼を疑うというのが失礼な気もする。何よりこのクッキーの味が証明している。甘いものが好きな人間に悪い人はいない。

「僕はいいけど、巴さんはいいの？」

「何かしら？全然オーケーよ」

「いや、普通男女でお茶だなんて恋人同士じゃないとしないですよ

……噂もあるし」

その噂とは、巴と十条両名は恋人説。

ああ、そっか。私は少し深読みし過ぎたのかもしれない。

何より、この人、まったく二人きりになってしまおうという状況に気づいていない。

それはそれでショックだけど、少し安心してしまう。彼には少なくとも、そういう意図はないらしい。

今の状況も二人きりみたいなものだけど。

「別に言わせておけばいいのよ。それとも私が十条君の恋人じゃ不満？」

「……巴さんが恋人なら、毎日がもつと楽しくなるんだろうな」

今更、言った後に思い返してみればお互いに酷く恥ずかしいことを言っていた。お互いに放った言葉で頬を赤くして、目も合わせられなくなり、家までの道のりを無言で歩く。

照れ隠すように、十条君から貰ったクッキーを齧って、悪くないかもなんて思つて、さらに赤面していると、

「じゅ、十条君、あのね——」

景色がぐにやりと歪んだ。

魔法の結界に侵入してしまった、と気づくのに数秒掛かって、十条君の一言で我に帰る。

「……また新しい魔法かな」

「……速攻で片付けて帰ったら、お茶だからね」

今日は来ない日だと思つていたのに。

気合の入れ具合は、いつもの五割り増しだった。

魔法討伐を果たして私は一度、十条君と別れた。彼がマフィンを取って来る間に少しでも掃除をと思つて掃除機に手を伸ばす。普段から掃除はしているから特別片付けるような所はないのが救いだけど、私としては着替えもしたいしシャワーも浴びたい。魔法討伐で動き回ったせいで臭くないか気になって嗅いでみるものの、自分ではあ

まりわからなかった。

取り敢えず、隣の部屋の十条君に一応、「シャワー浴びるから勝手に入って」と声を掛けてからシャワーを浴びてみたものの、上がると十条君はまだ来ていないようだった。

その、数秒後……。

「巴さん？」

玄関から、恐る恐るといった声を掛けて来る彼の声。まだ服を着ていなかった私は脱衣所から返事をする。

「ごめん、リビング行つてて」

「……わかりました」

妙に硬くなった様子の十条君。

部屋の構造は大体一緒だから、迷うことはないと思つて通した。

脱衣所の前を通り過ぎていく彼の足音を聞いて内心ホツとしていると、今度は彼とはまた違ったキューティクルな声がリビングの方からした。

「ボクの名前はキュウベえ——」

ちよつと待つて。なんであなたまでいるの？

いや、そもそも誰と話しているの？

キュウベえは魔法少女かその素質のある少女にしか見えないはずで、今リビングにいる十条君には関係ないはずじゃ……と考えたところで魔女のキスマークを付けられたあの男子にそういう心配とかは無駄かと思ひ出す。

慌てて身支度を整えてリビングへ行くと、正座して珍妙な小動物と向かい合っている十条君の姿があった。制服を脱いだ彼は、パーカーにジーンズ姿。いつものスタイルである。

「やあ、マミ。お邪魔してるよ。それより、キミは中々面白い少年と知り合つたんだね」

「ねえ、巴さん、この小動物、君のペット？それとも魔法少女につきものの変身契約生物？」

何故だろう。キュウベえのことは一度も話したことはないのに、大凡のキュウベえの正体を言い当ててしまう彼は興味深そうに一瞥し

「その後、私に助けを求めてきた。」

「ごめんなさいね、十条君。その子は私の大切なお友達なの。ついでに言うけどね、その子と契約したお蔭で私は魔法少女になることができたのよ」

「だよね。喋る動物なんていないよね」

「ともあれ、なんでキュウベえが此処にいるのだろうか。」

「キュウベえ、今日はどうしたの？」

「今日はマミじやなく、この少年に興味があつて来たんだよ」

「そういえば、私も彼について聞きたいことがあつたのだ。」

「十条君って何か特別な存在なの？」

「さあ、ボクにもよくわからないよ。なにせこんな事例は初めてだ。魔女にこれほど魅入られた人間がいるだなんて、見たこともないし聞いたこともないからね。……まあ、彼の存在がどうであろうと、ボクらには未知の何か特別な力があるんだろうね」

「……結局のところ、何も知らないってこと？」

「キュウベえにもわからないなら、私にもわからない。」

「十条君がこれほど魔女に好かれている理由は釈然としないものがあるけど、一旦保留だ。」

「でも、一つ言うとしたら、魔法少女が願いによって生まれるなら魔女は呪いによって生まれる。そんな呪いに魅入られた彼は普通の人生は送れないだろう」

「そんな宣告を受けて、大丈夫かと思って十条君を心配になって見れば、表情一つ変えない彼の姿がそこにあった。」

「退屈な人生を無作為に過ごすくらいなら、それでいい。少なくとも僕は、そのお蔭で巴さんと出会えたんだから」

「……こんな変わったニンゲンは初めてだよ。まったく、訳がわからないよ」

「そ、それはそうと十条君、早くお茶にしましょう」

「つい、十条君の一言にドキッとして私は誤魔化すように二人の間に割り込む。彼の作ったマフィンは、とても優しい味がした。」

お隣さんは魔法少女

僕の部屋の隣には魔法少女が住んでいる。名前は巴マミ。見滝原中学校三年生、つまるところ同級生でクラスメイトの彼女は他人に対して面倒見が良く優しい性格で、絵に描いたような魔法少女だ。それにスタイルはいいし可愛いし綺麗だし文句なしの美人と言ってもいいだろう。何事も卒なくこなす僕とは正反対な真人間。だということに、彼女は最近、僕の近くにいます。

「ほら、いつまで寝てるの十条君、朝だよ」

「眠い。あと120時間……」

「もう、学校丸々一週間休む気ね」

彼女が通い妻、或いは、幼馴染のように甲斐甲斐しく世話を焼いてくるようになったのも事の発端は三日前。朝起きれなくて朝食を抜いて来る僕の食生活を改善するべく、朝食の準備を買って出たついでにモーニングコールのサービス付きという奇妙なサービス精神を披露してくれたのである。

布団の中で挽がく僕と制服姿で準備を終えた彼女が徹底抗戦しているのもそのせいで、別に僕が頼んで世話を焼いてもらっているわけではない。

「起きなさい」

「……嫌だ。眠い」

「昨日も夜更かしてたんでしよう。毎日ゲームゲームって飽きないわね」

「あんたは僕の母親かよ」

思わず、定番のツツコミを入れてしまった。

そんな僕に対して、頬を赤らめてマミ（内心ではそう呼んでる）は拗ねたように言う。

「……せっかく朝御飯作ったのに」

しょんぼりされると悪い事はしてないのに悪い事をした気分

なってしまうから不思議だ。美少女というのは何をしても男が悪い風に思わせてしまうのだろうか。

僕も彼女の表情を曇らせるのは本意ではない。

ベッドから這い出る。布団の温もりが恋しく感じたが、途端に笑顔になる彼女を見てまあいいかと妥協する。

「さあ、ご飯にしましょう。顔を洗って来なさい」

「はい」

洗面所で顔を洗って意識をスッキリとさせる。させてリビングに行くのと、もう既に朝食を並び終えたママが食卓の前に座っていた。

「先に食べてれば良かったのに」

「二人で食べた方が美味しいでしょ」

「そうかな。変わらないと思うけど」

その感性だけは少しわからない。多少なりとは楽しいだろうが、僕は静かに食べたい人間だ。

朝食を食べ終わると今度は学校の仕度。ママは食器洗浄機を動かし、僕は制服に着替える。準備を完了していざリビングでママと合流すると彼女はその都度問いかけて来る。

「宿題はやった？体操服やジャージは持った？教科書の用意は完璧？」

「はい、やりました。んー、そういえば今日、体育なんてあったっけ？」

「今日は体育じゃなくて身体測定と身体能力テストの日でしょ」

「……そうだったっけ」

体育は勉強しなくてもいいから覚えているものだが、なるほどそっちな。

まあ、机に向かわない分マシである。

取り敢えず、もう一度着替えて準備は完了。

通学路に出て、そういえば女子には聞きたいことがあったのを思い出した。

「ねえ、巴さん」

「なに、十条君」

「身体測定で女子はスリーサイズ測るって本当？」

「な、なななにを急に言ってるの!？」

「いや、わかってるんだよ。でも、聞ける機会があるなら聞いておこう
と思ってる」

クラスメイトのただでさえ話さない女の子に聞くと引かれそうな
内容だ。だから、ママに聞いて見たのだが、どちらにしろ引かれるよ
うな内容なのは変わらない。その聞かれた本人といえば、顔を真っ赤
にしてあたふたとしている。取り敢えず、嫌われてはいないようだ。
もじもじとしながら上目遣いにこちらを見上げて来る。

「……わ、私の、スリーサイズ、知りたいの……?」

「いや、別に。数字が並んだところでよくわからないし」

知りたいのは都市伝説の方である。

「もう、女の子にとって数字は重要よ。十条君にだって好みの容姿と
かあるでしょう」

「数字は良くてもムキムキだったりすると僕やだよ」

胸囲の殆どが筋肉だったり。女性らしさというより逞しさの塊で
ある。普通の女の子が好きなら僕にとっては、ママのような容姿で性格
はこれくらいの子が……。ほっとするということかなんというか。

「私もムキムキは嫌よ」

「ムキムキの魔法少女とかいたらどうする?」

「……それはなんというか想像できないわね」

「うん。そうだな」

好みの女の子の話題はどうやら避けられたようだ。



学校でのママは人付き合いが良く誰とも仲良くしているイメージ
だが。表面上はそうしていても、どこか一線を引いているような雰
囲気が僕の目には見えていた。そう見えてしまっているのも魔法少女
という事実を知ってしまったためか、最近では意識しなかったクラス
メイトにも僕は目を向けている。

身体能力テストの準備運動に他の女子と上体反らしをする姿を眺

めながら、僕は隣で繰り広げられる会話をたまたま偶然盗み聞いていた。

「巴さんっていいよな」

「確かにあのおっぱいはなー」

「うちのクラスで一番大きいんじゃないか」

「俺、告っちまおうかな」

「え、なに、お前巴さん好きなの？」

「うちのクラスの有望株だぞ」

「そもそも彼氏の一人くらいいてもおかしくないだろ」

「そういや、その噂って……」

女子の体操姿から一転して、白羽の矢が僕に降り掛かる。

「なあ、十条、巴さんと付き合ってたんの？」

「いったいどうしてそんな噂が……」

わかってる。ママとあれだけ教室で関わっている男子はそんなにいない。

むしろ、僕だけの可能性もある。

放課後、友達と帰るなんて行動を見たことない僕は断言できる。

彼女はわりと友達のいない人だ。

「そんなまさか。僕が巴さんと付き合うなんてありえないだろ」

「だよな。陰キャラのお前が巴さんと付き合ってるなんてありえないよな」

僕の立ち位置はあまり喋らない隅の人。目立たなければ、平穏に身を浸すモブである。

「じゃあ俺、告白しよっかな」

「……」

彼らは再び女子達が準備運動する姿に視線を戻す。僕もまた、ママさんに視点を合わせた。彼女の上半体を反らす様はなんとというか色香がある。度々、視線が合う事に手を小さく降ってくるママに周囲の男子は沸き立った。かくいう僕は照れて手を振り返さず、そっぽを向いて彼女を無視した。

(見てたのバレたかな……)

胸を見ていた事がバレたら、いったいどうなってしまうのやら。

◇

十条君に向かつて手を振ると素気無く無視されてしまった。

ズキン、と胸が痛くなる。仲良くなったと思っただけだったのか、悲しくて少しショックを受けた。

身体能力テスト中の十条君を盗み見る。

色々と大変な女の子は早めにテストを終わらせており、その残り時間で十条君を眺めていた。

集中しないでいい時は、殆ど彼を見ているように思う。

「十条君、改めて見ると凄いやね」

私の隣に座ったクラスメイトの女子が言った。

「足も速いし、運動神経はそこそこ悪くないし」

「そこそこじゃない。誰も気づいていないけど、彼は男子の中で一番凄い」

私は断言した。

影こそ薄いものの、全ての競技において異様な身体能力を發揮していた。

それを見ていないのは、誰もが彼に興味がないだけで。誰もが、予想も想定もしていないだけなのだ。

それだけでもない。彼が走れば、足音も、風切音も無い。土埃さえ舞わない。

「そろそろ着替えないと……」

男子より一足先に早く、更衣室に向かった。

女子はこうして、更衣室を利用する。男子は気にしない人が多いから着替えることはしないけど、女の子は匂いとかそういうのに敏感だ。特に臭いなんて思われたら、それこそ終わりだ。

体操着を脱いでいると、彼女は言った。

「巴さんって十条君と付き合ってるの？」

思わぬ不意打ちに私の心臓はドクンと高鳴る。

「ど、どうして?」

「最近、仲良さげだから。十条君と関わり始めてから雰囲気少し柔らかくなったかなー、なんて。上手く言えないけど、前は少し張り詰めたような空気を放っていたから、巴さん」

「そ、そう……」

私自身気づかない点が多かった。

そんな私、近寄り難かったっけ。

「で、どうなの? 十条君と付き合ってるの? 女子の間では話題だよ」

「……お付き合いなんて考えたこともなかったわ」

私は真つ当に答えた。

今の関係が大事過ぎて、その先なんて……。

困惑していると、更なる追い討ちをかけてくる。

彼女（小鳥遊さん）はさらっと躊躇なく零した。

「じゃあ、私が告白してもいい?」

「そ、それは……」

ダメ。なんて言おうとして、私はそんな立場じゃないことを思い出す。というか「ダメ」ってなに。

「あ、今ダメって言おうとしたでしょ」

「そ、そんなことないわよ」

「やっぱり付き合ってる?」

「それも違うわ」

「はい、じゃあ今日の二人の行動をどうぞ」

言われて、顎に手を当てるまでもなく思い出してみる。

「朝、起きたら朝食と色々な準備をしてから十条君を起こしに行ったわ」

「起こしに行った? 鍵は?」

クラスメイトの皆知っている。私達は同じマンションに住んでいることを。それを前提にした上で、私は何の躊躇もなく答える。

「合鍵を十条君から貰ってるに決まってるじゃない」

「……そこがおかしいのよ。普通、決まってないから。なんで合鍵貰

えたのよ」

「面倒見るって言ったけど、一度断られて……ゴリ押ししたわ」

真面目に答えたら吃驚された。いったいどこに驚く要素が……？

「それで起こした後、二人で朝食を食べたわ」

「なんでお隣さんと普通に朝食摂ってるの？」

「だって、彼、殆どの確率で朝食を食べてこないんだもの」

「……うん。まあいいわ。突っ込まない。突っ込まないから続けて」

瞑目して静聴する小鳥遊さんに次の行動を説明する。

「今日のお弁当を渡して……」

「夫婦か！」

言ったら、怒鳴られた。

「お弁当ってなに？作ってあげてるの？」

「だって、彼、栄養の偏ったものばかり食べるのよ？」

「いや、知らないから」

「私の分も作るから一つも二つも変わらないし……手間も、一人分よりは楽だし」

「それで付き合ってるの？」

意外そうな顔をされた。小鳥遊さんはクスクスと笑っている。

「十条君は大切なお友達よ」

「はいはい、それ皆信じないからね」

そう。大切なお友達。

手放してしまったら、私は……。

友達以上?? 未満

毎晩、僕は壁越しに奇妙な音を聞いていた。シクシクと啜り泣くような少女の声。それも隣の部屋から聞こえるものだから、大凡の感が正しければ誰が泣いているのか想像に難くない。ベッドに身を預けて天井を見上げる。眠りにつこうとした僕の瞼を持ち上げるには十分な要因だった。

『……グスツ』

今日もまた、彼女は泣いている。

理由は知らない。だが、僕は知りたい。

できることなら、彼女の涙を止めてあげたい。

どうすればいいのだろうか？

葛藤する僕の心はてんでバラバラ。関わるべきではないと告げている。側にいてあげるべきだと告げている。まったくおこがましいことに呆れてしまった。

僕の立場で彼女の隣にいてあげると？

そんなものお門違いだろう。

僕は何者でもない。彼女の友人、隣人、ただそれだけ。

家族でもなく、恋人でもなく、赤の他人。

僕にできることなど何一つない。

昔の僕ならば、何も思いはしなかったしどうすることもできなかった。今だって出来はしない。それでも何か知己の友人が泣いているのを黙って聞いているのも何か違う気がした。

知己？——それも違うな。

理解者などではない。親友とは程遠い。

僕は彼女にとって何者だろうと考える。

そこに僕の認識は存在しない。ただ求めているのは、彼女が自分のことをどう思っているかという事実だけ。僕が彼女をどう思おうがそれは彼女の認識に準ずるものとなるう。

それは逃げだ。僕は自分で考えることをやめた。やめなければい

けなかった。彼女にとってそうでありたいと願うのが、みつともない
と思えてしまったから。故に逃げる僕は僕で完結することを恐れる。
現状を流れに任せる。僕は選択を放棄した。裏切られるのが怖かつ
たから。

「……まったく僕も変わったなあ」

どうでもいい。何もかもがどうでもいい。そう思っていたのに。
彼女といるだけで、灰色だった世界がまるで別の世界のように見え
た。

「着替えは……いいか。だらしない姿は晒し過ぎたわけだし」

よっと。ベッドから出る。仮にも女の子の一人暮らし、まず玄関の
鍵は開いてないだろうと踏んでベランダへと出た。だいたいのマン
ションやアパートはベランダから行き来ができる。隔りはあるもの
の無茶をすれば行けないこともない。迷惑も嫌われるのも覚悟の上
で、僕は自分の家のベランダから彼女の家のベランダに移る。

怯えさせてしまうだろうか。今更ながらにそんなことを思っ
て引き返そうか迷ったが、息を飲んだ気配がしてもう手遅れだと悟った。

「巴さん」

「……っ。十、条君……っ？」

恐る恐るといった風にママはベランダを部屋の中から警戒した。
ついで、僕の姿を見るとほっとしたように胸を撫で下ろす。

そりゃ、怖いよな。夜中にベランダから気配がして、訪ねて来る客
なんて。僕なら迷わずフルボッコか、それが異性ならあるまじき姿に
しているところだ。

この場合、ティロ・ファイナーレされてもおかしくはないが、今回銃
口は突き付けられておらず、安堵した様子のママがベランダの鍵を開
けてくれた。

「ど、どうやってベランダから？」

「それは……まあ、気合いで」

愛の力とか言うところだった。危ない危ない。ふざけてる場合
じゃない。

「何やってるの！一歩間違えばどうなっていたかわかってないの!？」も

しかしたら、死んじやつてたかもしれないのよ！」

「あまり僕を甘く見ないでよ。僕だって昔はアウトドアな少年だったんだから。この程度で転落して死ぬなんて絶対ない。ベランダからベランダに移ったくらいで大袈裟な……」

はた、と言葉は止まってしまふ。

先程まで泣いていた痕跡を辿るように、また涙が彼女の目尻から流れていた。

泣きそうというか、もう泣いてる。

何をしに来たのか不明瞭な僕は何をしに来たんだっけかと思ひ出す。

「それもこれも夜泣きしてる巴さんが悪い。ほぼ毎日夜泣きなんてされたら、こつちが眠れない」

挙げ句の果てに全責任を押し付けた。

「……悪い？泣きたくなる時くらい泣いたっていいじゃない」

彼女はやさぐれたように認めた。

反抗的な態度に可愛くないなあ、と思つてこちらも対抗した。

「ねえ知ってる？犬の夜泣きの治し方。構わない方が良いんだつて。構うと夜泣きすれば構つてくれると思つて治らないから」

「じゃあ、何しに来たのよ！」

……ううん？一周回つて冷静になった。矛盾している。だが、それも少しの間だけ、放つておいた結果がこれではないのか？

「……誰の所為だよ。そりゃあ僕だつて知らない女の子が泣いてたら放置するしかなかったけど、知らないわけじゃないから余計にどうしたらいいかわからないんだよ」

「知らないフリして、また明日会えばいいでしょ。……それだけで、私は」

言い淀むママの消え入りそうな声が胸に杭を刺したような鈍い痛みを走らせる。これが嫌いなんだよ。僕は。

「それができないから困ってるんだ」

くだらない考えが浮かぶ。

泣いてる姿が可愛いと思つた。その涙の理由を知りたいと願つた。

不謹慎ながら僕は彼女の涙に心を揺さぶられた。やれやれと心の中で肩を竦めて首を振る。

自分でもどうしたいのかわからない。

現状で、どんな解決策を求めているのか。結論が出ない。だから僕は、バカはバカなりに解決を急ぐ。少しでも彼女の心を軽く出来たらと願って。

「なんで泣いてるの?」

「……」

ママは当然のように黙り込んだ。ならば、質問を変えよう。

「僕にできることはないかな?」

「……それ普通、本人に聞く?」

やっと喋った。と思えば、ダメ出しである。

泣き笑いの表情。僕は続けて本当の自分を表に出す。

嘘偽りのない、僕という人間を。

虚構を捨てて、本心で語る。周りに合わせ、自分を隠して来た流されるままの自分を捨てる。

くだらない世界に期待も希望も持ち得ていなかった僕は、全てを捨てる覚悟で本心を口にする。

「女の子の慰め方なんて知らないし、いきなり抱き締められてもそういう行為は特定の間柄でないと適応されないだろう。僕と巴さんの間柄で抱き締めでもしたら気持ち悪がられるだけだろうし、そこは自重したんだよ。僕らの関係はそういうものではないだろう」

「……ふふ、抱き締めてくれるの?」

思った以上に好感触だった。

予想外だ。え、抱きしめるのありなの?

恋人とか家族とかそういう関係だけじゃないの?

その慰め方が適応されるのは。

「その……まあ、してもいいのなら」

壊れたブリキのようにカクカクと動いた口から、情けない声が出た。

「じゃあ……お願いしても、いいかしら」

そんなことも御構い無しにママは腕を広げた。涙の光るその瞳を
瞑り、縫るように手を伸ばす。

「し、失礼します……」

今更だが、僕はやれと言われてやれない人間だ。特にこういう場
合、女の子にお触りオーケーされても躊躇してしまう傾向にある。だ
から許可を貰っても戸惑ってすぐには抱きしめることができなかった。
合法的に許してくれているのに、僕というものはなんとも貧弱で
脆弱。至近距離に接近して、肌さえ触れ合う距離で止まること数秒、
やっと彼女を抱きしめる事に成功した。

「んっ……」

「……え、変なところ触った？」

ママの口から漏れた吐息が鎖骨にかかる。

ママの身体は柔らかい。温かい。いい匂い。髪もさらさらで当た
るだけで気持ちよくて、ずっと触っていたいという欲求が湧いてく
る。

「……違うの。なんていうか、人の温もりって久しぶりで……こんな
に、温かかったんだなって……」

「確かに……誰かを抱きしめる事が、こんな気持ちになれるものだ
は思わなかった」

慈愛にも似た、特別な感情。幸福感のようで、また別のものよう
な気もする。安心感、も何かが違う。わかるとすれば、もつとずつと
こうしていたい、永遠にこの時が続けばいいのに。という小さな願望
だけ。

「……そういえば気になっっている事があるんだけど」

腕の中で、ママが懇願するように見上げてくる。

「どうして名前と呼んでくれないの？」

「そ、それは……」

それほど親しくもない相手を名前で呼ぶのは気が引けるどころか、
女子というのも相俟って避けていた節がある。最初に「ママって呼ん
で」と言っていたにもかかわらず。つまり僕は逃げたヘタレである。

「呼んで。私の名前。十条君には、呼んで欲しいの」

強く懇願されて僕の決意は固まった。自分からなら勇氣の一つも出せなかったが、今なら自然と呼べる気がする。

「……マミ」

「……変な感じ。あなたにそう呼ばれると、とても幸せな気持ちになれる気がするの」

思った以上に恥ずかしかった。それでもそれを代償としていいと思えるほど、彼女の反応を見て幸福になれる自分がある。それはある意味で等価交換的なもので、代償の大きさなど気にはしていられない。代償が大きければ大きいほど、多幸感が増すというものだ。

「……」

「……」

お互いに言葉を発さないまま、数分が経過した。お互いに聞こえるのは互いの息遣いと心臓の音だけで、妙に暑苦しくなってきた頃、マミがようやく口を開いた。

「……もう一つだけ、いいかしら？」

あまりにも唐突だったため、反応に遅れてしまったが取り敢えず了承しておくと彼女はとんでもない要求をしてくる。

「……今日はこのまま、一緒に寝て欲しいなって」

ハチミツよりも甘い。甘言に一瞬間き間違えかと思った。頭の中で幻覚の類かと疑っている間に、誘導されるがままベッドの上に抱擁し合った型のまま投げ出される。

「ねえ、十条君、私達そういう関係になれないのかしら？他人より特別な関係。私は少なくとも、あなたとは……そういう関係でありたいなって思うの」

言葉の真意を理解するには僕には難題過ぎる。言うならばつきりと欲する。返す言葉に迷ってしまう。だから、僕が彼女の言葉に返事をするべく頭を回転させていた頃、腕の中で人の腕を枕代わりにくつろいでいた彼女から規則的な音が聞こえたのは、だいぶあと。

「すう……すう……」

「……あれ、巴さん？」

「ふう……」

「……もしかして、寝てる？」

がっしりとしがみつかれて起き上がることできない。起き上がったら起こしてしまう。安眠を妨げるのは良くないし、僕としても睡眠を妨害されるのはかなり好きではない。これでは部屋に帰ることもできない。

「まったく……甘えん坊だなあ、君は」

部屋に帰還することを諦めた僕は、彼女の要求通りに添い寝する。優しく髪を撫でてから、眠れない夜と格闘した。

ママの弱点

気がついたら朝だった。いつ眠りに就いたのかは定かではない。確かなのは、朝起きたらママが至近距離で寝転がってこちらの様子を伺っていることだ。寝起き一発目で深い眠りに就くところだった。

「おはよう、十条君」

「……おはよう、ごいいます。」

あれ。なんでいるの？と一瞬だけ思ったが、なんでいるの？は僕の方。

昨日、独り泣いている彼女を放っておけず慰めに来たらこのありさま、結局眠れなかったし今も睡眠不足でわりと不機嫌だが、まあこっちは色々と楽しめたので等価交換以上の報酬を貰ったと考えるべきだろう。

しかし、いつものこの時間帯といえば、ママは朝食作りに精を出しているはずであるが。

「……あの、巴さん？」

「ママ」

「聞きたいことがあるんですが——」

「ママ」

このままでは何を問うても答えは「ママ」となるだろう。

改めて、名前呼びで問答をすることにする。

「ママさん——」

「ママよ、十条君」

「……ママ、質問よろしいですか？」

少し堅苦しくなってしまうたがそこは許して欲しい。

「どうして寝ている姿を眺めているんでしょうか？」

問題はママが僕の寝顔を眺めていたこと。面白い事は何もないと思うが、どうも気恥ずかしい。昨夜、散々人の寝顔を見ていた人の台詞ではないが、バレなければ問題はない。

それをまったく知らないママが頬の緩んだ顔でこう答えた。

「ふふっ、どうしてかしら？」

——ふふっ、どうしてかしら？はこっちの台詞である。

もういいや。おそらく自分と同じ理由。何故か、異性の寝顔というのは人の心を踊らせる。それで十分、他は知らん。

問答は諦めた。

朝からこの笑顔を見ただけで良しとしよう。

「まあいいや。……それで、今日はどうするんで？」

今日は土曜日。見滝原中学は休校日。このまま家に帰ってもいいが、いつもの如く朝食は休日であろうとママが用意する。その後で昨日見れなかったアニメでもと思ったが、魔女探索に行くのなら付き合おうと思った。彼女、わりと怖がりである。生死を賭けた戦いに震えないわけがない。彼女はまだ、中学生なのだから。ただの子供だ。たとえ体がほぼ成熟していたとしても。

「朝食を食べたら、まずは課題でも片付けましょう」

「あれ、珍しい。ママが終わらせてないなんて」

「十条君だつて終わらせてないでしょう。やらせるのも二度手間だから、一緒に片付けようと後回しにしておいたのよ」

「それは要らないお気遣いどーも」

誠に要らないお気遣いである。お陰で最近は提出物コンプリート。教師陣にどやされることはない。

「そ、れ、で、十条君は何するつもりだったの？」

「ん。普通に怠惰に日常消費」

ずいっと迫られたママに本懐を伝えれば、さらにずいっと顔を寄せられた。腰に手を当ててまるでお姉さん………というか、精神年齢的にはだいぶママの方がお姉さんな気もする。現に僕はお世話される側だし。

「ほら、私がお勉強見ないとやろうとしないんだから」

「休日だよ？休日って何のためにあるか知ってる？」

「休むにしても、適度にやらなきゃいけない事はやりなさい」

叱られた。

「もおー。それで、そのあとは？」

「マミが魔女探索に行くならついて行こうと思っただけど……」

一瞬、マミの表情筋が仕事を放棄した。真顔になって、頬を赤く染めて、緩んだ頬を隠すように照れ隠しでそっぽを向く。

「……危険よ？」

「何を今更。出会ってから今まで、魔女探索で会わなかった事はあるか？」

「……本当に一緒に来てくれるの？」

「もちろん。というか、探索するなら探索するで言ってくれば僕もついてくのに。何ができるわけでもないけど、待ってるだけじゃつまらないし、一人じゃ心配だし」

「っ！」

今度は無言で抱き着いてくる。いきなりどうしたというのだ、この娘は。え、なに、死んで欲しいの？

やれやれと首を振って、ポンポンと背中を撫でる。

今日くらいは、優しくしてもいいだろう。

僕もそういう気分だし。なんか柔らかいし。日頃の感謝くらいしてもいいのではなからうか。

「今日は夕食は僕が作るよ。二度手間だしね」

「……夕食を、十条君が？」

「作れるのはお菓子だけじゃないんだよ。いつも一人分となると手抜きだけど」

「ふふ、期待してるわね！じゃあ、朝と昼は気合入れて作ろうかしら」
そう言って、マミはルンルンしながら寝室から出て行った。

その夜。魔女探索を早めに切り上げてマミの家に帰宅した僕達は、早々に別れてやる事をやる。僕は昼のうちに下拵えしておいた夕食用のビーフシチュー。マミは用意しておいたお風呂に向かった。そして上がるまでに慣れた手つきで調理を終わらせ、テーブルに並べたところでパジャマに着替えたマミが出て来た。

「まあ、美味しそうな香り。これって……私が好きだって言った。覚えてて、くれたのね……」

「……僕がママの話に興味ないと思ってたでしょ。意外と興味なさそうでも聞いているもんだよ。たとえばそれが聞きたくもない教師の御高説だろうとね」

まあ、本当に興味のない話は無自覚にも忘れていたものだが。くだらない事を考えていると、呆れたように瞼を閉じてママが言う。

「教師の話はちゃんと聞こうね。大事だから」

「興味がないんならしようがないよ。無理矢理聞いても覚える自信がない」

「もう、そう言つて……私の話も聞き流してたりするの?」

「んー。特にママとの会話で忘れるような事はないんじゃないかな」

ちよつと膨れたママに詰め寄せられたが、生憎とママの話はハーブティーは何が美味しいだとか、何処のケーキ屋さんが素敵だったとか、そんな話ばかりで有益情報しかない。甘いものこそ我が生き甲斐。しかし、ケーキ屋に一人で入るというのも、僕にとっては困難な話であるが。

どうやって入ろうか、なんて考えているとママが衝撃的な約束を口にする。

「今日も一緒に寝てくれるって約束は?」

「……?」

流石に僕が、というか男がそんな話を振られて覚えていないわけがない。が、実際、僕は覚えていなかった。

「……いつしたの?」

「さあ、いつかしら?」

はぐらかされた。

「もし私がまたお願いした場合、十条君はどうする?」

「……ふむ。男子として吝かではない」

「じゃあ、毎日って言ったら?」

「僕の都合が良ければ、それは構わないけど……」

健康の危機が伴うが。

それを聞いて、ママはにっこり微笑む。

「ほら、いましたわ」

……ずるくない？それ。

「はあ……。オーケー、僕の負けだ」

「意外にあっさり引くのね。もしかして……」

意外そうな顔できよんとする。その後、今まで見たことのないような意地悪な顔をした。

「わ、私の体でエッチなこととか考えてる？」

「……」

違った。そうだけど、頬を赤らめるオポジション付き。発言している自分でも恥ずかしいみたいだ。腕を胸の下に回して持ち上げるような仕草で掻き抱く。いつものママに増してちよつと声が高かった。

「いったいどうしてそうなった」

「だ、だって、今更だけど男の子と一緒に寝るだなんて……。いつ襲われてもおかしくないし、十条君は考えなかつたの？」

「まさか僕だって空気読むよ。ママノエッチー。ソナナコトカンガエテタンダー」

あの空気で襲う勇氣は流石にない。野蛮な狼にはなれない。

棒読みで挑発すると、ママはぽかぽかと肩を叩いてきた。

「もう、もう！絶対考えてた！たまたまに私の胸見てるし！」

……見てたことに関しては否定しない。

仕方なく、開き直ってみることにした。

「じゃあ、考えてるとしたらどうするの？」

「っ。そ、それは……っ」

「仮にもエッチなこと考えてる男の子と同衾なんてママはエッチだなあ。それとも、期待したとか？」

「……だ、だって、十条君なら、大丈夫かなって……」

それ、どっちの意味で？

まあ、何にしてもこれ以上、会話を続けるのはまずい。

せつかく作った料理も冷めてしまうし。

「さあ、冷めないうちに食べよう」

「そうね。いただきます」

「いただきます」

食事前に両手を合唱してお祈りするのがママさんちの習わしである。朝食の時に、矯正された。

ママはスプーンを手に僕が作ったビーフシチューを掬う。そうして口に運ぶと言葉より先に、ほろりと光る何かが落ちてきた。

「……美味しい」

たった一言の褒め言葉。それを言うのにどんな葛藤があったのだろう。彼女は一口目以降、スプーンを動かす手が止まってしまった。

実は、不味かったとか。それならそれではつきりと言って欲しい。僕は恐る恐る尋ねてみる。

「あの、ママ。不味かったら不味かったってはつきり言ってくれていいんだよ」

「違うの。……だって、誰かに料理を作ってもらうのって久しぶりで」「お菓子だって作ってるでしょ」

「それとは別よ。料理とお菓子作りは別……そんなの、十条君でもわかってるでしょ」

お菓子作りと料理は違う。確かにそうだ。

「でも、僕にはわからないかなあ。誰かに料理を作ってもらって泣くのは僕には無理だろうな」

毎日、ママに作ってもらっている立場でありながら、感謝こそすれ泣く程とは言えない。感謝というものを不器用なりに伝えた結果がこれなのだから。

「じゃあ、明日は私が君を泣かせる料理を作ってあげる」

「……辛いのはやめてね。別の理由で泣いちゃうから」

甘党故に、辛いのはダメだ。

そんなことを言って、僕は笑い合った。



最近、ママはあまえんぼうになっている気がする。寂しがりなのを隠さなくなつて、甘えたい時に甘えて来て「お菓子作つてー、紅茶淹れてー」などの要望が多く、しかし自分は甘える癖に勉強に関しては容赦ないのがたまに傷、夜寝る時も高確率で一緒に寝たがるから僕は不眠症になりかけていた。

変態と罵る前に僕の言い分を聞いてやあくれまいか。

ママさん、柔らかくて、温かくて、いい匂い。

そんなの抱き枕にしてたら眠れるわけがない。変なこと考えないわけがない。仮にも出るところは出てるし悪くないスタイル、それこそ大学生でも見間違うレベル。

初日のあれは流石に雰囲気的にそういう考えは起きなかったが、今は違う。

早いとこ僕が慣れなければ、授業を半分一人ボイコットしてしまう。

今日も今日とて眠気と戦いながら夕食を作っていると、包丁を持っている手とは別の手に痛みが走った。

「いつ……！」

滲む赤。材料に付かないようにその場を離れる。包丁も放置して、少し切ってしまった指を見ているとすぐにママが嗅ぎつけて来てしまった。

「大丈夫!??"とにかく、すぐに処置しないと……！」

そう言つて、はむと指を啜えた。僕の指が食べられた。舌で舐められる。唾液が絡みつく。そうして、ゆつくりと拘束から解放された指は血の跡なんてなかったかのように見える。

「絆創膏、絆創膏……！」

救急箱を持って来て、指を洗浄される。消毒液と絆創膏を使用して治療を終え、ママが私怒ってますという風に頬を膨らませて説教をして来た。

「もう、ぼーっとしてるからだよ。あとは私が作っちゃうから、十条君はゆつくりしててね」

戦力外通達を受けて、台所の支配圏を奪われた僕はママのエプロン

姿を眺める。

大人っぽい彼女が、実は本当は強がり
で泣き虫、寂しがりなのを僕
だけが知っている。

相違点

「みなさん、今日は先生から大切なお話があります」

午後の授業が始まり、先生が単刀直入に切り出した話は普通、生徒や保護者に関係する話なのだが彼女がこう言う場合、誠にどうでもいい話の可能性の方が高い。心して聞くように、と前置けばさらにその確率は高くなる。

ゴクリ、と息を呑む音が共鳴する中、僕は窓の外を見ていた。しかし、どうでもいい確率の方が高いのに、席替えで隣に座ったママはちよんちよんと僕の肩をつついて、ちやんと聞くように促してくる。仕方なく耳だけ傾けて、今日はどんな話か一人賭けで「どうでもいい愚痴」に賭けると同時、先生のありがたい御高説は始まった。心して聞くように、と前置いて。

「朝はパン派ですか？ご飯派ですか？——はいつ、十条君！」
名指し付きで、珍妙な問題を出した。

ああ、また、破局したんだ。とクラスメイト達の呆れと哀れみの声が重く響く中、白羽の矢を立てられた僕は適当に答える。

「どっちでもいいと思います」
「そうでしょう！」

バンツ、と教卓を叩いて先生は力説する。

「朝がパンかご飯なんて、そう、どっちでもいい！まして『俺、今日はパンが良かったのに』とか前以て言わない男には男子の諸君はならないように！」

やれやれまたか。と、僕は思う。これで通算何回目だろう。この手の話、最近、僕が割り振られている。

しかしそれでも、今回の鬱憤を晴らすには足りないのか先生の暴走は止まらない。さて、次です。と今日は続くパターン。

「味付けは濃い方が好きですか？薄い方が好きですか？——はいつ、十条君」

今日もまた、僕が集中砲火を喰らってしまった。

飛び火した僕に、マミ以外は同情すらしてくれはしない。

苦笑いしているマミを横目に見た。

何故か、注視されていた。

「……気分ですね。濃い味のものが食べたい時と、薄い味のものが食べたい時もありますし」

「そんな曖昧でいいんですかつ、十条君！先生の話を聞いていなかったんですか！」

しつこい先生である。気分は、女子にも男子にもあるだろう。

そんなことを考えていると、今度は別の人間に飛び火する。

「巴さんも男子にははつきりして欲しいですよー！」

火事とは、隣の家には引火するものである。

これまた慣れた様子で、マミも答える。

「そうですね。私も十条君にははつきりしてほしいかな、って思います」

そこで何故、僕が……。

朝食も昼食も作って貰っているから当然か。

だが、実際、気分なんだから仕方ない。

それを差し引いても、僕は食べ残すなんてことはしないが。

美少女が料理を作ってくれるんだし。

「別になんでもいいよ」

「そのなんでもいいが女子は困るんですよ！いいですか、献立を考える女性の身にもなってください、毎日毎日彼が飽きないように味付けを変えたりメニューを変えたりする女性の気持ちを！それを、なんでもいいと！女子の努力を何だと思ってるんですか！」

「……………」

僕としたことが言い返せなかった。まあ、確かに、夕食以外は任せっきりである。

目を逸らして苦笑いしていると、マミが弁護するかのよう先生に物申す。

「あの、先生……？十条君は夕食を……その……毎日、作ってくれてい

て……一人暮らしの私としても、すごく助かっていて……」
「ぐはっ!!!」

思わぬカウンターに遭ってしまった先生は教卓に突っ伏した。
うわあ。とクラスメイト達の悲惨な現状を見たと言わんばかりの
声が、痛烈に心を抉っていく。

それでも折れないのが先生だ。
何度、(破局で)折られたであろう精神を立ち上がらせ、子供達の教
師足らんとする。

しかし、内容が100%プライベート、教師として尊敬すべきかど
うかは置いておいて。

「ですが、嫌々食べて仲が悪くなるという事態もあり得るんですよー」
「そ、そうなんですか……?」

くだらない先生の経験談に喰いついたのはママだった。恋愛の話
には些か興味はあるのか、華のある乙女らしい喰いつき。やっぱり女
子はコイバナの類が好きなんだろう。

「先生なんて何度、味の好みや食事の話題で破局になったことか……
!」

「た、確かに……」

説得力があり過ぎて困る先生だ。

クラス全員の心が今、一つになった。

「ですから!十条君と巴さん、あなた方はもう少しそこらへんを考慮
するべきなのです!」

一周回ってお節介。

しかし、これではまるで僕達が付き合っているみたいに聞こえる。

このままいくとクラスメイト達の話題の餌食になる。

それは少し我慢ならないので、はつきりと否定しておくことにし
た。

……ママも迷惑だろうし。

「別に付き合っているわけじゃないですから」

一瞬、世界が凍りついた。

え、なに？僕なにか変なこと言った？

「……えっ？」

様々な方角から、意外だというような嘆息。

隣のママからも聞こえたような気がして、いざ振り返ってみれば、

「……っ」

彼女は泣いていた。

「……ママ？どうしたの？」

どうすればいいかわからなくなって、慌てて椅子を蹴飛ばし立ち上がる。

触れたら壊れそうな肩を震わせる彼女は涙を拭って、気丈に笑ってみせる。

それが、いつもの強がりだとは明白だった。

繋いだ言葉も、誰にも迷惑をかけないものを選ぶことも、わかりきっていた。

「ごめんなさい。私、少し、勘違いしてたみたいで……」

「か、勘違い……？」

「十条君と私は……付き合っているものだとばかり、思っていたから……」

うんうん。と、頷くクラスメイト達。白い眼は僕に向けられていることは明白だった。

「先生。保健室に行つて来ます」

「……不純異性交遊だけは先生許しませんからね」

いつもの愚痴モードは何処へやら、申し訳なさそうに逡巡した後、茶化す先生を無視してママの手を取って教室を出た。

扉を閉めると、先生が授業を再開する。

思わぬ事態に混乱してしまったが、やってしまったことは仕方ないと割り切つて。

「もう一つだけ大事なお話があります。ああいう不誠実な関係は作ら

ないように、特に鈍感な男子は気をつけてください。それでは授業を再開します」

誰のせいだ。もう一度、クラス全員が一致団結した瞬間だった。



保健室。……ではなく、屋上。マミの手を引いて、二人だけで話せる場所をと思ったのだが、生憎とこのような場所しか思い浮かぶはずもなく、二人で空を見上げる。何から話していいかわからず、手だけを握って何か話さねばと思うも頭の中は真っ白だ。

マミが僕と付き合ってる。付き合ってる？少なくとも、マミはそう思っていたと。さっきの会話から察するにそういうことになってしまったみたいだが、当の相手の僕にはその記憶がない。好き、とは言った覚えはないが。いったいいつからそんなことになっていて、二人の間に認識の差異が出たのだろうか。

「……あの、マミ」

話しかけた。けれど、無視されたのか、必死に涙の跡が残る顔を見せまいと俯く。

こうなってしまうては、普通に話を聞いてくれそうにない。

だいぶ拗ねているみたいだし、怒ってもいる、その原因は僕なのだろう。だから、率直に聞くことにした。

「僕らの関係って何？」

「ただのクラスメイトでただの隣人」

答えた声には、静かな底冷えとする怒気が含まれているような気がする。

「少なくとも、十条君は私のことそういう風にしか思ってたみたいね」

冷たい声で突き放すような言葉。

繋いでいた手を払って、マミはフェンスまで歩いて行ってしまった。

「……マミはどう思ってたんだよ」

「言わなくてもわかるでしょ」

それがわからなかったから、今こうしてここにいる。

まったく僕というやつは鈍感らしい。少なくとも、そんな人種ではないと自分では思っていたのだが、生憎と理想と現実は違うみたいで、意外にも好かれていたみたいで……自分が情けなかった。

ツンと拗ねたままで、ママは頬を赤く染めながら、自慢の髪をくるくると指に絡めて、恥ずかしそうに独白する。

「私……好きでもない男子と、一緒に寝るなんて……しないんだから」
そう。

僕らの認識の違いは、そこからだった。

ママはぎこちない笑顔を浮かべて、気丈に笑ってみせる。

冗談を言うように、本心を吐露する。

「まあ、道理で十条君はエッチなことでもキスもしてこなかったわけね」
笑い飛ばそうとして、濁いた笑いしか出せないママ。

色々と誤魔化そうとしているように見えた。

寂しそうな表情。笑顔とは違う、どこか愛おしく感じるそれは、ママの一面のほんの一部。

「……本当にカッコ悪いなあ。僕は」

魔女探索じやついて行くだけで何もできず、見ているだけ。あまつさえ女の子を泣かせて。本当にいいところなしである。その上で女の子の方から好意を口にして欲しいだなんて。

さて、そんな僕のどこがいいというのだろうか。

「ママは僕のどこを好きになったの？」

「……さあ、どんなところかしらね」

また、はぐらかそうとする。もうこの話は終わりだとも言うように。なかったことにしようとする。これ以上、傷つきたくはないために。

「戻りましょ。十条君」

くるりと踵を返して、屋上を後にする。

「戻る」という言葉が、より深い意味だとはいくら鈍感な僕でも気づいていた。

それでも、仕切り直しというのは必要で、今話をしてもきつと聞いてくれないだろうな、と僕は逃げた。

黒い影

真つ暗な部屋の中、開け放たれた窓から月明かりが差し込む。カーテンは風に揺れてゆらゆらと部屋に出たり入ったりと静かに音を立てていた。その部屋の中、僕はベッドに座り鏡を見つめる。電気もつけないで、とママがいたなら怒りそうだが生憎と最近顔は合わせても会話すらしてくれない。接近すると逃げるように走って行く。朝も会わなければ魔女探索で会ってもスルー。空気のような扱いだ。もつとも、空気のように扱うのなら、もつと上手くやれと言いたいが、悪いのは僕だ。

鏡の中、そこには一人きりの僕。首筋には魔女の口付け。それは暗闇でも、色濃くはつきりと浮き出していた。

『……いい加減認めたらどうだ?』

鏡の中の僕が呆れたように言う。死んだような目をしているのはお互い様。その言葉が何に対してかもわかっていくくせに、僕はまったくわからないフリをする。

「何のことだよ」

『巴ママを好きだったこと』

核心を突く言葉に今度は呆れたように僕が息を吐く。呆れたのは、それが僅かながらに気づいていて気づかないフリをしていた僕にだ。『言っておくが、後悔してからじゃ遅いんだ。いや、いつか後悔する。想いを伝えられなかったことも、傍にいられなかったことも、そしてこの先も……』

何か言いたげだった。鏡の中の僕は、泣いている。僕の頬に涙はない。だというのに、鏡の中の僕は涙を流しながら鏡に手を当てていた。

『驚かないのか?』

「君が僕なら知っているだろう。僕はそんな超常現象、信じないわけがない」

『話が早いな、僕』

「君は僕だからね」

『ああ、そうさ。君は僕で、僕は君で、そしてどちらでもない』

曖昧だ。言わんとしていることはわかるけども。

「つまり君は、一秒前、十秒前、一日前、もしくは未来、それか今、ありえたかもしれない僕」

『平行世界、ってやつだな。さすが僕、理解が早い。だけど、現実にありえているよ。後悔した僕が言うんだから間違いない。それに、今君が見ている僕は、複数の僕だ』

「……複数の可能性か。たとえば？」

『巴マミと付き合っていた僕。鹿目まどかと付き合っていた僕。美樹さやかと付き合っていた僕。暁美ほむらと付き合っていた僕。佐倉杏子と付き合っていた僕。妹と付き合っていた僕』

待て。聞き捨てならない可能性の話が聞こえたぞ。それに、知らない名前も。

『君がいずれ出会う人達さ。それよりだ、まず僕は君に話さなければいけない事がある。でも、実際、見た方が早いし君ならその光景を理解できるだろう。魔法の口付けに手を当てて、呼んでやれ。蝶の魔法の名前を』

「……魔法の名前なんて、知らないけど」

『それでも僕は知っている。認識すれば簡単なことさ』

言われた通り、手を首筋に当てた。魔法の口付けがある右の首筋を。そうすれば名前が浮かんだ。知らないはずの、魔法の名前が。

「……クルル？」

魔法の口付けが刻印された箇所が妙に疼き、熱を放ち、焼けるような激痛が発生する。触れた指先が熱を感じているが、焼けるほどの痛みじゃない、むしろ温かい。座っていたベッドから転げ落ちて床で激痛に悶えていると、その間に幾つもの光景、いや記憶が脳裏をよぎり過ぎ去って行く。

魔法少女の末路、ワルプルギスの夜、ソウルジェムの正体、キュウベエの正体、変えられない幾つもの悲劇。全てを見終わった頃には、床に這い蹲りながら鏡の僕と同じように涙を流していた。何時間も

転がっていたようだ。時計の針はもう既に頂点を通り過ぎていた。

『気分はどうだい?』

「……最悪だ」

だろうね。と、鏡の僕は口を噤んだ。

そして、僕の中に知りもしない少女達に関する感情が溢れる。

愛したはずの者達へ。

もう一度、会いたいという思いが……。

虚無感と、絶望と、いろんなもので掻き混ぜられた心で、僕は鏡の僕を見た。

「……道理で旨い話なわけだ」

『インキュベーター。それが彼の正式名称だ。もつとも呼称なんて些細なことではかない。だけど、これでわかったろう。僕ならこう思うはずだ』

鏡に映る僕と僕の動作は寸分変わらず、同じ言葉を発した。

『宇宙の延命のために少女の命を代償にするなんて馬鹿げてる』

いつかの僕が経験した、キュウベエの言葉。彼らが人間の少女を犠牲にするのは、人間が家畜を喰らうのと一緒だという。彼らにとつてはそうなのだろう。そうかもしれない、だけど……。彼女達は生きている。僕なんかよりもずっと、懸命に、毎日を……。それを騙すような形で未来を奪うなんて。

不甲斐なさに僕は、思考を止めた。

「……そんな世界、なくなればいいのに」

『同感だ。救う力のない僕達は、その事にずっと嘆いていた』

「今の僕も無力だよ」

『確かに。僕達は失敗した。悲しい事に誰も生き残らなかった。……仮に彼女は生きていても、すぐ別の世界へと旅立ってしまった』

「それが、あの娘か……僕はまだ知らないけれど」

『見せた……という表現は正しくないのかもしれないけど、僕とほむらが結ばれた世界もある。だけど、彼女は結局、立ち上がり、別れを告げた。大切な友達を救う約束をしたから、一緒にはいられない』

時間遡行。そんな特殊で強力な魔法を持った少女がいるという。

幾つもの世界を渡り歩く彼女はたった一人の友達を救う為に何度も同じ時間を繰り返し返している。その度に、僕が今見た絶望を突きつけられ、戦っている。

「……僕は本当に面倒な性格してるよな」

『僕が経験として渡したそれは、僕には関係ないのだろう。だけど、それを願わずにはいられない』

「誰かを愛した僕が、愛された僕が、それを望むなら。いいだろう。請け負った」

『ありがとう。という言葉は要らないのかな、苦手だろ』

「……まあね」

乾いた笑いが響いた。どうやら僕は上手く笑えないらしい。

「……いつか救えない事に後悔する時が来るのだとしても、今だけは」
『頑張れよ。少年』

鏡に映る僕の背後にはクロアゲハのような羽を持った少女が立っている。ふわふわと浮かび、三日月の形に唇を釣り上げ、ケタケタと笑っているかのよう。首筋の魔女の口付けを撫でるとそいつは嬉しそうに消えていくのだった。後に残ったのはいつも通りの鏡だけ、暗い部屋の中で目を閉じ僕は夢想する。



しかしまあ、あれだ。いくらそのような事実を突きつけられたとはいえ、ヘタレな僕にマミをどうこうできるわけもなく、魔女探索を一人行う事になってしまった。一体全体どうしてこうなったのか、話しかけることすら躊躇った僕はどうにもマミに接する方法がわからなくなってきたいて、偶然を装って魔女探索に顔を出すという暴挙。実際問題、魔女の結界に高確率で侵入（誘い込まれるともいう）できる僕は、マミの行動範囲を特定するのも無理はない。そして、それがわかっていてマミも近辺は避けるだろう。つまり僕からそう簡単には逃げられない。

自分で言つてて残念なことにストーカーみたいだ。

そして更に残念なことに、今日はある意味で見たくない顔を見てしまうことになった。

魔女探索に向かう途中、CDショップにどこかで見たような少女達が音楽に耳を傾けていた。僕はそれをスルーして魔女探索へと向かう。見なかつたことにした。

そんな僕の頭の中に、自問自答をするように少女の声が響いた。

『なんで無視したの?』

『僕は彼女達を知らない設定だ。話しかける理由がないよ』

『他の世界では彼女だったのに? ぎーんねん』

『今の僕は無関係なんだよ』

独白は哀しきかな、己の心を否定しているようであった。経験として引き継がれた「僕」の記憶は感情にさえ左右する。話しかけたいという衝動が意味もわからず駆け巡った。

誘惑を無視してCDショップを通り過ぎて行こうとすれば、突然、背中にドンという衝撃がはしった。うおっと思わず息を吐き出し一歩踏み出した足で耐えると、背中越しに振り返る。見れば、鹿目まどか、彼女が尻餅をつき、そしてその友人が早口に「ごめんなさい」と謝罪を口にする。ふむ、よくできた後輩だ。

「大丈夫かな?」

手を差し伸べると少女、鹿目まどかは少し申し訳なさそうな笑みを浮かべて見上げながらに手を取る。

「ご、ごめんなさい……えっと、先輩?」

首を傾げて初対面なのにそう詮索されるもんだから何が起きたのかこちらも不可思議に眉根を寄せる。助け起こしながら、まるで他人事のように俯瞰した推測と結果を伝える。

「確かに僕は君達と同じ学校で三年生だ。そして、君達は同じ学年に見たことはない。僕の交友関係も殆どないことを考えても同じ学年のものとなれば三年もいるんだから大体は把握しているが、やはり精査しても君達とは初対面のはずだ。よく先輩だとわかったね」

「そ、その……なんて言ったらいいか、どこかで会ったような……」

「つーか、それ言ったら先輩の観察力とかも凄いと思いますよ」

「いや、同学年に見たことないし、ただの推測だ。僕は最上級だしね」
嘘です。事前知識で知ってました。いや、見たことないのは本当だけれども。

「ごめんなさい。急いでて、前見てなくて本当に申し訳ないです」
「いや、いいよ。急いでるんなら、早く行きな」

「おっ、先輩いいやつですね」

おだてるような美樹さやかの声に僕は苦笑いを返す。

「でも、今度は気をつけてね。世の中良い人ばかりとは限らないから」
「はい、ありがとうございます!」

元氣よくぺこりとお辞儀をする少女達に手を振って返す。そうして走り去っていく彼女達を眺めながら、僕は独り言のように呟いた。

「……本当に気をつけて」

運命とは、時に酷なものだと思う。

別れを告げた少女達との小さな邂逅を後に、向かった先で運悪く必然的に魔女の結界に引き込まれた。まあ確かに探していたものだが、マミと会えるかもという淡い期待に添っただけのその行動で魔女を倒す術などあるはずもなく、辿り着いた先で少女達は運悪くも魔女の結界に囚われていた。そんな彼女達との、二度目のこんにちわ。

「あ、また会ったね、鹿目まどかと美樹さやか」

「せ、先輩!」

「よかった……」

しかし、その言葉は最後まで紡がれなかった。チラリと浮遊する魔女の手下に視線を向けて、結界に目を向けて、もう一度こちらを見る。
「……先輩にはこれが見えないんですか?」

慌てる様子のない僕に焦燥する彼女達は問い掛ける。いや、驚愕とか、そういつた混乱と困惑をぶつけたかったのだろう。不安を露わに年上に助けを素直に求めた。

「いや、見えてる見えてる」

「どうしてそんな平然としているんですか!」

「どうしてって言われても……日常茶飯事だし」

「先輩。パネエ！」

美樹さやかはまだ突っ込む余力を残しているようだ。

そんな元気っ子を尻目に、鹿目まどかの腕に抱かれた生き物に目を向ける。

「それは君が説明してあげたら？ キュウベえ」

「こんな状況でも君は平然と……マミが近くにいるのかい？」

「いや、最近喧嘩してね、そうでなくとも君が念話で呼んでいるのだから？」

「……君、何か雰囲気変わったかい？」

「そうかな？ 僕は至って普通だけど」

僕は僕だ。別の世界線の感情にのっとられてやしない。僕の体も、心も、魂も、僕だ。そういう自覚はある。

ともあれはぐらかされた救援に諦めをつける。知ったところで意味はないし、ここで隠したところでマミから直接聞けば良い話だ。

そう考えていたところで、銃声と共に僕の鼻先を何かが掠めた。

四散する、左の魔女の手下。僕はなんともなしに銃撃の発生源を辿る。そこには、何故か膨れっ面のマミが銃口を僕に向けていた。

「……そう。年下の方が好きだったのね。このロリコン」

「……いや待って。誤解だ。誤解じゃないような気もするけど、誤解だ。マミ、僕は君と話をするために——」

ズドン。今度は僕の髪をかすめて後頭部に浮遊していた魔女の手下が四散する。

そして、幽鬼のような覇気でふふふと笑いを漏らす。

何故だか悪寒を覚えた僕は鳥肌が立ち、肌が粟立つのを感じた。その証拠に魔女の結界が解かれ、一目散に魔女の手下が逃げていく。相当怖いらしい。彼女には魔女も裸足で逃げ出す怒気が……。

「……ふう。さて、と。そこに隠れてるあなた、今回は譲ってあげる。魔女もあまり遠くには逃げていないようだし。今なら追いつけるんじゃない？ さあ、こんなロリコンは放っておいて行きましょう、説明と一緒に美味しいケーキと紅茶を——馳走するわ」

腕を引かれていく鹿目まどかと美樹さやか。有無を言わず、引き

剥がすように連れ去っていく。そのどこに気に触る要素があったのか、物陰に隠れて様子を伺っていた気配がその姿を現した。暗色を基調としたどこかの制服を彷彿とさせる服装の、マミと似た力を感じる黒髪の少女の腕には丸い何かの機械。コスプレ、といえればそれまでの妙な姿の彼女が、ガツと僕の腕を掴む。

「あらそう、この人は要らないのね。じゃあ、遠慮なく。行きましょ、十条君？」

「ちよっ、そういう意味じゃ——」

マミの言葉が最後まで紡がれることはなかった。別にマミが消えたとか、そういう意味ではない。マミが口を開けたまま、時が止まったように停止したのだ。

いや、停止したのは世界の方だ。

本来なら、僕にこんな力が……！

感動したいところではあるが、トリックは知己のもの。

故に僕は腕を掴んでいる、否、組んでいる彼女に向ける。

「あら、驚かないのね」

「まあね」

「ちようど良かったから、拉致るわよ」

「うん。僕も少し話がしたかったから」

「ふふっ、私もよ」

そうして、突然現れた彼女は僕を引き摺るように拉致していった。

太陽は昇り、月は沈む。

暁美ほむらが提案したのは僕の家だった。腕を組み歩くこと数分、何度か寄り道はしたものの魔女の結界には誘い込まれず、玄関を開ければ寂しい我が家。適当な部屋にほむらを通すと取り敢えず、紅茶を淹れて部屋に戻った。すると彼女は懐かしそうな表情で本棚を漁っていた。

「……いきなり初対面の人の部屋を漁ったら普通は怒られるよ」
「あなたはそんなこと思わないでしょう？それに一応、初対面じゃないようだし」

この時間軸の僕と何度も繰り返しているほむら。僕らに接点はない。だが、時間遡行を何度も繰り返した彼女なら何度も何度も知人達とは顔を合わせているようだ。それがたとえどんな形でも、どういう結末になろうとも、泣いて、心を砕いて、逃げて、戦って、諦めて、その繰り返しの中で過去の僕達は邂逅を果たした。

今の僕は「暁美ほむら」という人物を知っていて、経験之魂に直接刻まれた、僕という紛い物。平行世界の「僕」は僕であると同時に、僕とは違う存在でもある。

そんな僕との対面は、暁美ほむらには喜ぶべきものだったようだ。
「ねえ、そうでしょ、だーりん」

「待って僕そんな呼び方されてたの!?!」
「そうよ。そして、これからも。私は誓ったもの。救済の魔女の下、何度繰り返しても何度も好きにさせてみせるって。経験を通しているあなたにそんな必要はないようだけど」

初耳だ。経験を刻まれた身としてもそんな事実は一切記述されていないのだが。バグか、イレギュラーか、この状態が異常なので何とも言えないが彼女が言うからにはそうなのだろう。

「それで話して?」
「単刀直入に言うわ」

話題を変えた先、ほむらは僕の首筋を指差した。

「何よそれ、誰に付けられたの？そのキスマーク」

嫉妬半分、ヤキモチ全開、イライラとした様子で訊ねる。なんとも器用な性格だった。

「ああ、これはね……」

簡潔に語る。取り敢えず、身に起きた全てを。自分が知っていることを全て。きつとそれは一笑に付して然るべきことであつたが自然と信じられている自分がいること。だからこそ、伝えるべき言葉がある。

「……僕は君の味方だ。どんなことがあろうと僕は君を支えるよ」

何度も繰り返した先で、離反してしまった彼女の心の支えにならねば、そう思つた平行世界の自分の感情はやはり自分のものでもある。くだらない自己中心的な考えだが、伝えたいこと、伝えるべき言葉は伝えた。それに対してほむらは驚愕に涙を流した。これまた器用に片目だけ泣き、片面は決意の表情を固めたまま。

「……本当、女誑しのクズ野郎ねあなた」

と、罵つてみせる。

「この世界のあなたはバママミが好きなんでしょう？」

「そうだね。僕は少なくとも今もそうだよ」

「それなのに他の女を部屋にあげるなんて」

「……君がこの部屋に來たいって言ったんだろ」

「ええ。私、あなたのそういうところも好きよ」

無表情だった。無表情で告白された。

隣で聞こえる喧騒を掻き消すような静寂。

きつと、彼女は長い繰り返しの中で感情の出し方というのを忘れてしまったのかもしれない。

大凡の好意というものを捨て切っているような、そんな顔。

彼女にとつて楽しいこと、嬉しいことはもうどこにもなかったのだらう。

もつとも、彼女が時間を旅する度に生まれた世界があるからこそ、この僕がいるわけだが。

「——さて、話の続きをしましょうか」

直後、隣に現れた暁美——。

「ほむらでいいわ。私とあなたの仲じゃない」

彼女は僕の腕に腕を絡めてこれでもかとしなだれかかる。

僕としては年下の彼女に緊張していたものの、予想だにしない衝撃が吹き飛ばしてしまう。

ドパンツツツ——!!!

耳慣れた銃声と破砕音。おまけに壁が文字通り吹き飛んだ。円形の穴を開け、粉塵舞う僕の部屋は悲惨な状態でさつきまであ——ほむらが座していた場所は瓦礫が山となっている。

『ちよつ、ママさんどうしたんですか!?!』

『……そこに泥棒猫がいた気がして』

『猫? 撃つちやダメですつて!』

『そ、それより隣の人、大丈夫かなあ……?』

『大丈夫よ、鹿目さん。隣は十条君の部屋だから』

喧騒は壁をブチ抜いたことによりクリアに聞こえてきた。姿こそ見えないが、完全にマミの部屋と直通の穴が出来たわけだ。

「あらやだ怖い。十条君、あの女私の純潔を物理的に奪いに來たわ。助けて」

白々しくしれつと甘えてくるほむらは気まぐれな猫のようにスリスリとすり寄った。もし一步間違えば、いや判断を間違えばほむらの体に穴が開くことになっていたと思うと割と無視できない状況だ。それを事前察知したであろう彼女は余裕の表情。「よし、勝った」と言わんばかりで何処か満足げだ。

「……あ、あの、大丈夫ですか?」

戯れつく黒猫もとい、ほむらの頭をわしやわしやと搔き乱すと不満そうに鳴く。

そうしている間にひよつこりと顔を出したのは鹿目まどかだった。

今は珍しい殊勝な娘もいたものだと感慨深げに浸る。心配してきてくれた彼女は僕とほむらを見てぎよつとした。

「あ、その、し、失礼しました……!」

「……あ、うん?」

何故か顔を赤くして引つ込むまどか、どうやら彼女は僕とほむらに盛大な誤解をしたようである。現状は誤解ではないのだが、僕は彼女といちやついてるわけではないので誤解と言っておこう。

『ほら、大丈夫だったでしょ?』

『は、はい……その、二人とも怪我はなさそうでいい雰囲気だっ——ひっ!』

『………イイ、雰囲気?』

『ちよつとママさん落ち着いて!まどか、見間違いじゃない!?』

『うーん……。え、でも、並んで座ってたし……』

『まどかの主観から客観的に見た結果を言えって言ったんじゃないくて、そこはフォローしてよお!』

……隣は何やら楽しそうである。

次の瞬間には、冷気が隣から流れてくると共に。

とてもいい顔のママが入り口(穴)から僕とほむらを見ていたが。

完全にほむらさんはトリップ状態、役に立たない。ママを当然の如く蚊帳の外で微動だにしない。

僕は僕で絶対に当たらないという自信がある。

たとえ、わなわなと震えるママに連動して銃が振動していてもだ。

「……ごめんなさい、お邪魔したかしら」

「いいえ。あれくらい愛の障害だと思えばどうってことないわ」

挑発しているのか素なのか結果的にはママにとってほむらの行動は彼女の心を揺さぶるには十分だった。獲物を睨むその瞳は……あれ、何故か僕に向いている。

「後輩に鼻の下伸ばしていやらしい!」

「あはは……」

違うとも言い切れないので苦笑いで誤魔化す。正直、悪い気はしていないのだ。

突き放すことも出来ず、誤解を解くことも叶わず、当初のママを探していた目的を達成するどころか状況がより悪化している気もする。だけど、恋煩いのような想いとは裏腹に、繰り返し続ける少女を放つ

ておけないのもまた一つの事実だ。

◇

夜が来る。

今日知り合った鹿目さんと美樹さんが帰って一人になってしまった部屋で私はどこか寂しい気持ちを抱えていた。

——また、独りだ。

いつにも増して思う。寂しいって。

そうなったのも彼が原因だ。私が突き放したらいきなり他の女を部屋に連れ込むし、仲が良さそうだし。

面白くない、と思った。

大好きが傷を胸の奥に刻んでいく。

それがとても痛くて、切なくて、悲しくて。

……寂しくて、泣きそうになる。

私が壁に開けた穴。それはまるで私の心にぽっかりと空いた穴を表しているようで、穴が大きければ大きいほど寂しさは増幅していく。

膝を抱えて、穴を見つめた。

もしかしたら、十条君が心配して来てくれるんじゃないかって

……。

そんなはずはないのにね。バカだな私……。

結局のところ、独りで生きられないのは私。寂しさに彼を求めているのも私。突き放したのも私。

……こんなことなら、夢だけを見ていればよかった。

そう思うのも、私だ。

もし私だけ勘違いしていられたなら、その幸せはずっと続いたはずだった。

私だけが幸福になれば、それでよかったはずだった。

彼がどう思おうとその関係は続いたはずだった。

彼は甘えさせてくれるから。傍にいてくれるから。何も言わない、

言えない、そんな関係であるべきだった。たとえ言葉にして愛を示さなくても幸福は確かに存在していたはずなのに。私は多くを願った。

——彼を私だけのものにした。

欲深い願い。

それはきつと私の不安の裏返し。

この先もずっとこのまま続けばいいのに……。

なんて永遠を願ったのは、私が唯一無二、安心していることが出来た場所だから。

帰る場所だと、思いたかったから。

束の間の平穏だと思いたくはなかったから。

陽が落ちて、闇が満ちる。魔女の活発になる時間帯。ゴールデンタイムと呼ばれる時間帯に奴らは行動を開始する。逆に深夜はあまり活発な行動を見せない。それはひとえに街が寝静まるから。活動する人が少ないと魔女はそうやった行動を取る。

そんな時間帯だというのに私は魔女探索に行く気にはならなかった。膝を抱えて、未だ誰かを待っている。穴の向こうに見えるかもしれない彼を待っている。

そうしてるうちに時間は刻一刻と過ぎて……。

時計の針が頂点を降り始める。

何もする気にならないまま、私は気分転換にシャワーを浴びることにした。

温かいお湯は私の冷え切った身体を温める。だけど何故だろう、そうすることで余計に内側と外側の温度差がはつきりとわかってしまう。寂しさを紛らわせようとしたけど、上手くいかない。気分が変わるどころか余計に意識してしまう。

やめた。温かいお湯に浸かるのは今日はいいわ。シャワーヘッドから流れたお湯が身体を伝って落ちていくのを眺めながら、混ざる他の水分を自分のものとは思わないことにした。涙を流すこと、その熱

さの分、私の心は冷えていくから。

「……ふう。寝ましよう」

誰に伝えるわけでもなく、独り言。

「おはよう」も「おやすみ」も言う相手はいない。

たったそれだけのことで私は心底寂しくなってしまう。

まるで、魔法少女になった最初の夜のように……強くなるうって決めたのもその時だった。

部屋に帰ると十条君の部屋と直通で繋がっている穴は以前、開いたまま。

キユウベえの気が利かなかったのか、或いは神様の仕業か……魔法で開けた穴を誰も埋めてくれはしない。私の心の穴もそう。誰かが埋めてくれるわけもない。

「……寝てるわよね？」

ただ、それはちよつとした確認だった。

帰って来てないだとか。また魔女に絡まれてるんじゃないとか。そういう言い訳に本心を隠して、私はゆつくりと穴に近寄った。顔が見たいたとか、起きてるかな？とか気にしているわけじゃない。そう、私は別に下心があるわけじゃない。ただ確認したいだけで私が安心して眠るのに必要な行動なのだ。念のため魔女の反応を確認したけど、近辺には出現していないようだった。おそらく出現したのもあの女が狩ったのだろう。そう思うことにした。

私の部屋と彼の部屋を繋ぐ穴を覗く。

しかし、電気が点灯していないので中は暗くてよく見えなかった。

街の明かりと、月明かりとに照らされる部屋は人気のないような気もする。

ここからじゃよく見えないし、いないようなので私は穴を跨いで彼の部屋に侵入する。

「……ほっ」

——いた。穴からじゃ死角になっていたベッドに眠っていた。

思わずほつとした私はほつとけない彼の傍に寄る。別に寝顔が見たいとかじゃないけど、起こさないように抜き足差し足で忍び寄る。

「私がこんなに苦しんで眠れない夜を過ごしているのに……」

寝顔を突いてみる。頬はフニフニしてて柔らかい。あつたかくてその感触に思わず胸の内の熱が涙になって溢れそうになる。なんとかして抑え切ろうとしたけど、それは無理な話だった。

「……あなたが悪いんだからね」

髪を抑えて前屈みに覆い被さり、そつと彼の顔に影を落とす。繋がりがあつた唇の熱を確かに感じて、離す瞬間に痕跡を掻き消すように彼の唇を舌がなぞった。

「……おやすみなさい」

とてもイケナイ事をしている背徳感に対して浮かぶ罪悪感。でも、私はそこに確かな安心と幸福を感じ取っていた。